この広場をもっと豊かに

〝みいけ〟1000号記念座談会

▼……本紙は十二月十六日発行で、千号を迎えました。組合員・家族の皆さんには、いろんな思い出があるものと思われます。編集部では別項の人びとのお集まりを願い、〝みいけ〟をめぐっていろいろと語り合っていただきました。ご参考になることと思いますが、皆さんもまた職場で家庭で語り合ってください。そして、みんなの力で、もっと素晴らしい、豊かな〝みいけ〟にしてゆきましょう。

人それぞれの結びつき

語り継いできた生活と闘い

山下　機関紙〝みいけ〟が十二月十六日発行の分でついに千号になりました。これまで歩いてきました、三池炭鉱労働者の生活と闘いの歴史の重み、というものを感じないではいられません。

〝みいけ〟は今、全国のたくさんの人びとからも愛読されているように、内容もほかになく豊かで、また熊本県総評が毎年行う〝機関紙コンクール〟では常に一位を占めています。

この〝みいけ〟をふり返って見ますと、昭和二十六年ごろを契機として、つまり組合員のための機関紙だという性格が前面に出てきています。

そのころから強まった生活改善闘争が背景になっているのでしょうが、組合が印刷所の経営に乗り出し、あのニュースカー初代〝はたかぜ号〟を貰いいれたのも、このころのことでした。

以来機関紙〝みいけ〟は、労働者の生活と闘いを語り継いでゆく家庭、また討論のための広場の役割を果たしてきています。

たとえば〝五人組〟、〝新婚訪問〟、〝俺にもいわせろ〟、それに〝姿見〟など、特殊のコラムをつくり出してきましたし、「こんちきしょう」と思うことは〝ひとロ〟欄へ、といった具合。

職場作家も、この〝みいけ〟を母体として生まれました。ここにいられる岡浦さんや平田さんをはじめ、今は停年のため退職された田中敏さんなど。

今の三池労組の組合歌〝炭掘る仲間〟も、〝みいけ〟で育った創作グループの共同創作という、特別の誇りに包まれています。以前にも〝三鉱労組歌〟というのがあるにはありましたが、「こんなもんじゃだめだ」というわけでしたが。おかげでいまの素晴らしいうたが生まれたわけです。これこそまさしく、炭鉱労働者の心情を美しくうたいあげていて、全国的にも親しまれております。これとて機関紙〝みいけ〟と、濃いかかわり合いをもっているわけです。

その〝みいけ〟が、いよいよ千号。これを記念に、ここでもう一つ発展させていきたい――こう思い、語り合っていただくことになりました。

どんな視点からでもよろしゅうございますので、ひとつどなたからが……。

作品が佳作になってから

平田　率直にいって、私は以前〝みいけ〟にあまり関心をもたんじゃったとですよ。私が宮浦の安全灯に働くかたわら、大牟田南高校の定時制高校でまだ勉強していた二十五、六のころのことですが、何の気なしに〝みいけ〟を読みよったら、夏の文芸募集をやっていることを知ったんです。

「ねア、こらいっちょう、詩でもつくって見るか」、という気になったんです。

忘れもしません、その題は「親父のにおい」というもので、さっそく投稿したわけです。

まだ自分の幼いころの思い出でしたが、とかく寒い日なんか親父が、私を暖めてやろうと思って、私の体をよく、自分の股ぐらにいれて抱いてくれていたもんでしたが、そのときの親父の独特のにおいが、私には忘れられなかったんですよ。

ところが、その詩が佳作入選として〝みいけ〟に紹介されたんです。同じように、その年の新年文芸募集にもまた、私は一つの詩をつくって投稿しましたら、これがまた佳作入選。うれしかったですねエ。三十一年ごろのことですが私の心が〝みいけ〟とつながったのは、実はそのときからです。そのとき初めて、この〝みいけ〟が組合の新聞だということを知ってびっくりしました。（一同大笑い）

世に残った私の感想文

中原　私も〝みいけ〟に親しみがもてるようになったのは、例の三池闘争のときからだと思っております。

いま私は〝みいけ〟に大変感謝しております。と申しますのは、私は主人たちの就労後、一つの感想文を書いて〝みいけ〟に掲載していただいたものでしたが、その感想文が、先に発行されました〝三池主婦会二〇年史〟などに、改めて紹介されたんです。

実は私は、自分が書いたその感想文なんか、すっかり忘れてしまっていたときに、改めて掲載していただいたでしょう。もう感動してしまいました。そして、みずみずしい気持である文を書いた当時の自分をふり返りますと、いまの自分が反省させられるんですよ。私の感想文がこうして、世のなかの記録に残ったのも〝みいけ〟のおかげです。ほんとに感謝しております。

私も創作を通して結ばれた

岡浦　私も前は〝みいけ〟は読みよらんやったですね。三十年以降地域分会の班長になって、〝みいけ〟を自分が配らんならんとつなったでしょう。配る以上は、まず自分が読まんならでけんでつなって、ですね。（笑い）

それに三十三年の文芸募集を〝みいけ〟がやったのに、私は創作を書いて応募したんです。佳作になって、それが〝みいけ〟の一ページをさいて掲載される。もっとも、そんときには入選作はなかったですが、話はずーっと昔あった赤線でのできごとで（内容は、割愛させていただきます。整理者）。それからです、とくに〝みいけ〟を読むようになりましたのは。（笑い）

いま私は、社内報の〝くろだいや〟も見ますが、それは見出しだけで、〝みいけ〟は一面から六面までズーッと読み通します。自分たちの新聞だという愛着があってですね。

それでも、まだまだ書き手は随分いるはずなのに、なかなか音沙汰なし。心のなかに秘めたままになっているのか。何しろ書くのは厄介だし、ついテレビを見てしまう。だれもがこんなところかも知れませんが。（一同共感）

私は早いころから関心を

松原　私は、はっきりした〝みいけ〟との出合いというものはもっておりません。私は、二十六年当時からすでに職場委員をやっていた記憶がありまして、もうそのときから〝みいけ〟を配ってまわっておりましたから。

それに私は、以前から短歌もつくっていましたし〝みいけ〟とのかかわり合いは早いですね。ただ資本の合理化攻撃がはげしくなってくる時点を契機に、私はいつか職場の労働者の心情を織りこんだうたをつくり始めていくようになりました。それまでは、夢見たいな作品だったのでしたし、ふり返ると冷や汗もんです。

別にそのための先生という人もなく、みんなでサークルをつくってやるくらいで。そうですね。岩本宗二郎さん（郷土歌人）にときどききていただきましたか。

夫婦ゲンカの記事

びっくりした――でも〝みいけ〟は神さま

平田　私は、うかつなことはしゃべられんばい、とつくづく思い当たったことがあるんですよ。前の日に近所の人が死になさったですけん、いまも忘れんですが、小崎さん（編集者）がうちにきなさったとですたい。

ところがちょうど、私どもが夫婦ゲンカのまっさいちゅうじゃったでしょうが。（笑い）

小崎さんなでげんですね。すぐそれが〝みいけ〟にのったわけです。泣きながらやりよるケンカがそのまま。（大笑い）

小崎　あのときは、どっちに味方すればよいかわからんだったからですね。

平田　もちろんあれ以来、夫婦ゲンカもいたずらに感情的にやるのでなく、やっぱり組織的に問題を追及するように変ってきたですが。（一同うなずく）

それこそみいけは神さま

島　私も、三池闘争前には〝みいけ〟は見ていませんでしたね。関心をもち始めたのはやっぱり闘争からこっちで、特に主婦会が生活革命運動に立ちあがってからだったですよ。

なるべく肩を怒らせないもの、女でなくてはどうしても書けないものを――、そんなものがほしいですね。詩もよし、短歌もよし、もっともっと創作などもほしいし……。

書いて感じる責任の重み

宮崎　私も読み始めたのは、やっぱり三池闘争中ですね。それ以前には、労働者としての感覚自体がなかったわけですよ。つまり〝みいけ〟を読み始めたということは、自分のものの自方が変ってきたからなんですね。

今も――、読まない人はいます。職場新聞がスムーズに発行されているような職場の人は、〝みいけ〟をやっぱり読んでいる。

それというのも、自分のところの職場新聞の記事が〝みいけ〟に出ていたりすると、それがとてもうれしかっですよ。

私も、〝みいけ〟に書いたことはあります。なるほど、「書け」といわれんと書けませんが。でも自分が、ひっぎれ紙にでも書いたものが、活字になって出てくると受ける感じがすっかり違ってくる。とにかく責任の重みを感じますね。ほしいことは、今少し階級性を出しては、ということです。

読まれるのは職場の体験記

岡浦　やっぱり読まれるのは職場の問題に関する記事ですよ。とにかく一人ひとりは、話したいことをたくさんもっとるとですよ。たとえば原告団一人ひとりのあのレポートがいい例で。知らんことばかり。それと同じで、一人ひとりが進った悩みや苦しみなどをもっていながら、それが胸のなかに秘められたまま。

中原　たとえば〝みいけ〟にこのごろ連載されました、今は亡くなられたCO患者の松島さんの遺稿を、私は感動しながら読ませていただきましたけど、あれが埋もれたままだったなら、だれの目にもふれずに終ってしまったことだったでしょう。自分の力を過少評価せずに書く。すると自分の文章も、まんざらではないなアとつくづく思ったこともあります。

宮崎　とにかく、職場の人がポンと書いたのが第一ですね。

中原　一人ひとりの体験もまだまだ表面にでていません。これからは皆さんにもっと書いていただくように積極的に呼びかけもいたしますから、編集部の方で手をいれてもらい、よりよいものにしてだしてください。下手なままでもいいですから……。

山本　思ったままを。

宮崎　〝みいけ〟は全国的にも読者が広がっているわけですから、階級性がいま少しといったものを感じます。

山本　でも、論文のようなものばかりじゃだめですよ。固くならずに、自然のままの姿を書い

まだ埋もれている事実

つづけてゆきたい〝姿見〟

山下　だいたい〝みいけ〟は各ページの特徴というものを出していて、これは外部の人びとからそれ相当な評価を受けているんです。第一面が機関の報告。第二面が闘いの背景に関する問題。三～四面の原告団のページは別としまして、五面が自分たちの職場に関するもの。そして六面が、生活・主婦に関するページ。

これが〝みいけ〟を豊かにもしているものでもあって、それに階級的視点からはっきりと闘いの方向性をうち出してゆくのが、〝主張〟欄。これも読んでもらいたいのですが、ね。

宮崎　やっぱり、自分のまわりに活動家を結集して読み合うことから始めて、自分たちなりの結論を出してゆく。

も一度ふり返って進もう〝みいけ〟過去の歴史

山下　山本さんは、自分から〝みいけ〟の編集部長として、ひところ大変なご苦労があったはずですが……。

十八年の歴史刻む今の題字

山本　思い出に残る苦労は、の記事にひっぱられたことが忘れられんですね。

機関紙〝みいけ〟の紙面の、昔と今の違いは、昔のが「米がどうの」「生活がどうの」という記事がおもだったのに比べ、今は戦闘的な姿勢がでてきていることですね。そこに今のは、筋ばかりを追

投稿は少かったですか。

山本　少なかったんですよ。〝みいけ〟が、中央委員会で問題になったことがあるんですよ。「〝みいけ〟はいったい何だ」と。

私も、カーッとする方ですから「投書や投稿を受けいれる体制もとります。どれだけでもよかですよ。固くならずに、自然のままの姿を書い

ないことを、一歩も譲らず主張したんです。

そしていよいよ最後になって、私はいってやりました――「いろいろご意見があるようだから、遠慮なくだしていただきます。そのため〝みいけ〟に十分スペースはとってください。」

山本　思ったままを。

中原　思ったままを。

宮崎　〝みいけ〟は全国的にも読者が広がっているわけですから、階級性がいま少しといったものを感じます。

山本　でも、論文のようなものばかりじゃだめですよ。固くならずに、自然のままの姿を書い

出席した人びと

平田　光男（宮浦指導部）
中原　千春（主婦会本所支部）
岡浦　益実（三川指導部）
松原　直吉（港務指導部）
小崎　文人（みいけ編集担当）
島　文枝（主婦会会長）
宮崎　勝（四山指導部）
山本　博貴（主婦会本所支部）